

一、御霊によって神の御住まいとなる

聖句をご覧ください。〈あなたがたもこのキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。〉とあります。〈御霊によって神の御住まいとなる〉のは、だれでしょうか。〈あなたがた〉です。〈あなたがた〉とは、だれでしょうか。エペソにおこされた、主イエス・キリストを信じる教会であり、エペソに限らず、主イエス・キリストを信じる教会です。

教会は、主イエス・キリストを信じる者たちが集まって礼拝をささげるところです。そうしますと、そこには御霊なる神が、すなわち神御自身がおられます。教会は、生ける神の御住まいとなる器です。そういうわけで皆さま、極力足を運んで、この所にお集まりください。3年前に新型コロナウイルスによる感染症が発生し、またたく間に世界中に広まりました。これを機に多くの教会で、礼拝をネットで配信し、自宅でも礼拝に参加できるようになりました。それは良かったと思います。特に、毎週礼拝に行かれない方が自宅で礼拝に参加できるのは良いことでした。ですが、礼拝の基本は、一つ所に集まって献げるものです。

二、御霊を宿す器となる

エペソ書2章22節が語っているのは「あなたがた」が、すなわち教会が神の御住まいとなるということです。ですが、神の御住まいとなるのは、キリストを信じる者たちの集まりだけではありません。実は、私たちの一人ひとりも神の御住まいです。

人間とは不思議な生き物です。不思議な生き物と言っよりも、特別な被造物と言ったほうが的を射ると言えます。創世記によれば、人とは神のかたちに、神の似姿に、男と女に創造されたことを知ります。また人は、大地のちりから、すなわち泥から形造られ、神である主が、鼻に命の息が吹き込まれたことによって、生きるものとなったことを知ります。人(アダム)の鼻に吹き込まれた、神のいのちの息とは何でしょうか。霊です。人はそれぞれに神からの霊を吹き込まれて、その人になっていきます。なぜ自分が生涯に亘って自分なのでしょうか。ある朝目覚めたら、昨晚とは異なる家で、別人として目覚めることがないのでしょいか。理由は、人がそれぞれに、神から霊を授けられているからです。そして人が死ぬ時、霊だけが肉体から離れてフワフワ生き続けることとはありません。伝道者の書にありますように、〈12・7【口語訳】ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授

けた神に帰る。〉のです。

人が死んでも霊魂は死なないという考え方は、ギリシア思想から来たものです。もちろんギリシア以外にも、多くの地域で見られる土着信仰にもあります。ですが、キリスト教に影響を及ぼしたのはギリシア思想でした。キリストの福音がヨーロッパに入ったからです。そういうわけで、聖書が語る霊と、キリスト教が宣教されて行く中で入り込んできた霊魂の教えは異なります。人が死んだら、霊は神の許に帰り、復活を待つ状態になります。これが旧約聖書、及び使徒たちが語った福音のことばから導き出されることです。

人が主イエス・キリストを信じたときに、神の御霊を宿します。したがいまして、「私はイエス・キリストを救い主として信じています。しかし神の御霊をいただいていないので、ほしいです。御霊をください」と祈る必要はありません。「主よ、宣教する力が必要なので、御霊の満たしをお与えください」と祈るのは良いことですし、私共ペンテコステの伝統を持つ教会が、大切にしてきたことです。

三、キリストにあって

三度、聖句をご覧ください。〈このキリストにあっては、どどういう意味なのでしょう。20節で語られたことを指しています。20節にはこうあります。

〈使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。〉と。20節の主語は、19節の〈あなたがたは〉です。「あなたがたは」、すなわち教会は、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられています。教会は、聖霊が降られることによって誕生しましたが、その後は働き手が必要でした。それは、何だったでしょうか。第一に、使徒たちでした。主イエスと行動を共にし、復活の証人となった人たちです(↓使1・22)。パウロは、生前の主イエスと共に生活をしていなかったため、例外です。また預言者は、使徒たちが語る証言を助ける霊的な賜物を持った働き手でした。そういうわけで、教会の信仰は、聖霊が降ってから、各自が思い思いに信じたものではないのです。それは今日も同じです。そして、使徒たちが語った証言は新約聖書に残されているというのが、教会の考え方です。一方、預言者の働きは、直接的に結び付けられるものがないのですが、一つは説教者、他は各自が御霊に導かれて奉仕することです。

私たちは一人ひとりにおいても、教会というキリストの体においても、御霊によって神の御住まいとなるように召されています。今年は、教会としても個々人においても、御霊によって神の御住まいとされることを意識して歩もうではありませんか。